

## 子どもの発達と家族関係に関する縦断的研究(1)

—子どもの問題行動の発達: internalizing problems に関して—

○菅原 ますみ・眞榮城 和美・酒井 厚  
(お茶の水女子大学) (白百合女子大学大学院) (山梨大学)

### 《目的》

本研究は、母親の妊娠期よりの縦断研究の一部である。今回の発表では、中学生期に至った対象児童の internalizing な問題行動に関する解析結果について報告する。

児童・思春期の問題行動と精神症状については、表1のような2つに大別されることが知られている。先行研究(菅原, 1997)では、疾患レベルの問題発現に関連する要因は疾患カテゴリごとに異なり、子どもの問題行動の発達を考えていく際にはカテゴリごとの検討が必要であることが示唆された。Externalizing problems に関しては既に報告してきたが(菅原他, 1999)、本報告では internalizing problems を対象として、中学生期に見られる引きこもりや抑うつなどの発現にどのような先行要因が関わっているのか検討をおこなう。

表1 児童・思春期の問題行動と精神症状

a. 統制不全/外面化型 (under-controlled/ externalizing)	b. 統制過剰/内面化型 (over-controlled/ internalizing)
* 注意欠陥・多動傾向	* 過度の不安・恐怖
* 攻撃的・反社会的行動	* 引きこもりや抑うつ
* 過度の反抗傾向など	* 様々な心身症状等

### 《方法》

**対象者** 1984年8月に神奈川県K市市立病院産婦人科で対象児を出産した家族について開始された縦断的研究(Kitamura, Sugawara, Sugawara, Toda, & Shima, 1996; 菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999)に登録されている被験者のうち、出産後11年目の追跡調査に応じたのは313世帯(父親、母親、子どもそれぞれに対する質問紙調査に世帯単位で回答が得られた家族)で、2000年の出産後15年目の追跡調査に応じたのは277世帯であった。追跡調査を実施したのは、妊娠初期・中期・後期、出産後5日・1ヶ月・6ヶ月・12ヶ月・18ヶ月・6年・9年・11年(1996年調査)・15年(2000年調査)の12時点である。  
**調査内容** 子どもの問題行動と精神症状: AchenbachとEdelbrock(1983)が作成したChild Behavior Checklist (CBCL; 子どもの問題行動調査票、日本語版: 坂野ほか, 1994)の親記入版(4~18歳用)を8歳時(生後9年目調査)・10歳時(11年目調査)および14歳時(15年目調査)に実施した。回答は、2:いつもそうである、1:ときどきそうである、0:そんなことはない、の3段階で評定してもらった。それぞれの年齢において想定される2大因子の再現を確認するために因子分析を実施し(主因子解・バリマックス回転)、externalizing problems と internalizing problems の2因子を得た。 $\alpha$ 係数は両因子とも各時期で.90以上であった。子どもの抑うつ傾向: Birleson(1981)の子ども用の自己記入式抑うつ傾向尺度(日本語版、村田, 1996)を10歳時と14歳時に実施した。各項目は、

“とてもよくねむれる(逆転項目)”, “泣きたいような気がする”, “逃げ出したいような気がする”に代表される18項目であり、1:そんなことはない、2:ときどきそうだ、3:いつもそうだ、の3件法により回答を求めた。各項目の $\alpha$ 係数は.82である。先行要因: 関連が予想される先行要因としては、子ども自身の乳幼児期よりの気質的要因(生後6ヶ月・18ヶ月・6年目・8年目・11年目・15年目で測定)、家族関係要因(親子関係、親の養育態度、夫婦関係、家族全体の関係性)、家庭の社会経済的状態、子どもの学校適応の程度などの諸変数について測定を実施した。

### 《結果と考察》

#### \* 14歳時点での引きこもり行動との関連

14歳時点でCBCLの引きこもり項目(「引きこもって人と交わらない」)に該当した8名(出現率:2.89%)についてその特徴を先行要因との関連から検討した。引きこもり行動は思春期以降に多く出現するものであることが知られているが(伊藤ほか, 2002)、不登校や学校でのトラブルなどの社会的不適応行動が先行して存在する場合があると指摘されている。とくに反社会的行動や注意欠陥多動行動などの externalizing problems が社会的孤立を招き、引きこもりや抑うつに至ってしまう可能性は様々な臨床例報告でも指摘されてきた。本サンプルについても思春期において引きこもり行動が見られる対象児の externalizing problems 傾向は幼少時より有意に高いことや家族関係上の問題も存在することが示された。子ども自身の気質的要因を含めた多変量的な解析を進め、抑うつ傾向や internalizing problems 傾向に関する検討とともに総合的な考察をおこなう予定である。

表2 CBCL項目から: “引きこもって、人と交わらない”  
(n=8/277, 2.89%)

関連する先行要因	該当群	非該当群	t-値
[Externalizing problems: EBP]			
生後6ヶ月時のEBP	15.25	13.07	-1.28 <i>ns</i>
生後18ヶ月時のEBP	18.86	15.65	-1.62 <i>ns</i>
5歳時のEBP	23.50 >	17.17	-3.77 **
8歳時のEBP	36.00 >	25.94	-3.66 **
10歳時のEBP	35.25 >	27.86	-3.39 **
14歳時のEBP	35.22 >	24.95	-3.96 **
[親子関係: 親の子どもに対する否定的感情]			
妊娠中期(母親)	3.28	3.27	-0.22 <i>ns</i>
生後18ヶ月(母親)	4.14	3.99	-0.15 <i>ns</i>
5歳時(母親)	4.57	3.94	-0.95 <i>ns</i>
10歳時(母親)	5.00 >	3.23	-2.37 *
10歳時(父親)	4.63	3.67	-1.12 <i>ns</i>
[子どもの親子関係評価]			
10歳時(母親に対して)	10.56	10.74	0.39 <i>ns</i>
10歳時(父親に対して)	8.89 <	10.12	1.93 *

\*:  $p < .05$ ; \*\*:  $p < .01$

Masumi Sugawara, Kazumi Maeshiro, Atsushi Sakai